

2007・平成19年

復習用現代語訳

同郷の銭明経せんめいけいは詩と賦ふが得意だ。毎年予備試験委員主催の試験では古詩が出題されるが、銭はいつも成績トップである。ある年の課題は「天を支える柱をテーマとして賦（長編詩）を作れ」というものだった。銭は、試験会場に入る時、酒を飲みすぎて酔っぱらってしまい、受験者用の個室に入るとたちまち酔いつぶれて寝てしまった。毎年銭と一緒に試験を受ける受験生は、彼がいつもトップであることを嫉ねたんでいたので、彼に声をかけて起こしてやろうとはしなかった。答案を回収する係官が銭のそばを通って初めて彼に試験時間の終了を告げた。銭は最初（酒のためか？寝起きのためか？）ぼんやりしていたが、もう間に合わない。そこで急いで課題を聞き、（長編詩でなく、わずか四句の）七言絶句一首を書き記した。

長江が海に注ぐ所 川幅は広すぎ 対岸は見えない

見わたすと 白雲がひとつ 山がいくつか

どうしたら わが身を天柱の頂に置き

もうえから

太陽と月が人々の間をめぐる様子を見られるのだろう

試験委員は彼の答案を見て、「この人は心の中にどれほどの雲夢大  
湿原を呑みこんでいるのだろうか！」と評価し、成績第一とした。

訳注

- 1 乃ち∥∴（して）初めて
- 2 揚子江頭∥長江が海に注ぐ河口∥川幅約10キロ（ただし今の地  
形）※問題文の注11では「揚子江∥長江の別名」となっているが、  
長江の下流域を指すのが通例。この詩のスケールの壮大さをよりよ  
く表現するため拙訳は訳注によった。
- 3 走ル∥歩く↓めぐる
- 4 知らず↓よくわからないほどすごい∥！

音読用書き下し文

吾が郷の銭明経、詩賦を善くす。毎歳督学の科歳に古詩を試みる  
に、銭は必ず冠軍たり。一歳、題は「天柱の賦」為り。銭、場に入  
る時、酒を飲むこと多きに過ぎ竟に大酔し、号に入るに輒ち酣睡す。  
試を同じくする者其の試毎に首に居るを疾み、肯へて之を呼びて醒  
めしめず。納卷の者其の旁らを過ぐる有りて乃ち之に告ぐ。銭始  
め蒼然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句一首  
を書す。

我揚子江頭われようすこうとうに來たりて望めば 一片いっぺんの白雲はくうん數点やまの山  
安くんぞ身みを天柱いただきの頂さかしまに置き 倒じつげつに日月じんかんの人間じんかんを走るみを看る  
を得んえ

学使卷がくしかんを得て、評いして云ふ「此この人胸ひときょうちゆう中に幾雲夢いくウンボウを吞のむかを知  
らず。」と。仍よりて第一だいいちに取る。

※追記…「人間」を「にんげん」と読むと問5ができなかったはず。  
漢文では「じんかん」と読む。漢文特有の読みを漢音かんおんといい仏教で  
の読みを呉音ごおんという。たとえば儒教の經典けいてんは仏教の經典きょうてんとなる。問  
題文の主人公も漢文では錢明経めいけいだが呉音では錢明経みょうきょうとなる。「覚え  
る必要があるのですか？」という質問を十年に一度受けるが、覚え  
きれない！過去問を音読すれば必ず漢音に慣れる。たとえば日月は  
「にちげつ」ではなく「じつげつ」だ。声を出さずして読み慣れな  
し。読み慣れなくして合格なし。

## 解説

### ステップ1 最初の2行を見る

錢明経という人物の下の傍線(1)が読めないので停止。でも、  
問題文の真ん中に詩があるので、詩についての文であることはわか  
る。

## ステップ2

最後の3行を見る。

オシりから 読むとわかるよ お結論≡10

早読みは 最初と最後に 主語述語≡6

うしろからながめると、末尾の傍線D「よりて第一に取る」が設問になっている。最後の3行の最初（8行目）は詩の一部なので、それ以上読むのを停止して問6に行く。

## ステップ3

最終設問の選択肢を見る

説明・注に答えあり！≡5この技を何度も使う。問6の説明文に  
より傍線Dの「第一」は「第一位」。そして問6は「学使が銭明経を  
第一位にした理由」を問う。「学使」とは注12と注3により「試験：  
責任者注3」。だから問6は「試験責任者が銭明経を第一位にした理由」  
を問う。

ここで原文に帰り、傍線Dの直前文の注13と問6の選択肢で共通  
する言葉を探すと次のとおり。

注13 広大な湿原

① 雄大

③ 気宇壮大

④ 大胆

⑤ 大らか

ヒツカケを見抜くために、選択肢の文を確認する。

「廣大」は「広くて大きい、空間が大きい」ことだが、④の文「あえて提出した大胆さ」と⑤の文「気にしない大らかな性格」では「大」を「性格・人柄」の形容として使っている。③の「氣宇壮大」は「氣宇」を知らなくても、熟語にすれば「氣」は「空気」、「宇」は「宇宙空間」となって「空間」と結びつく。そこで①③を正解候補として退却する。これで十分。これが大事。

話は、錢明経が詩の試験で第一位になる結末に向かって進むはずであり、「錢ちゃんは詩がすごい」が筆者の主張だろう。

問1〔主張〕(1) 右の作業をしていないと難問だが、話の結末から回答できる。

「善」を熟語にして正解を探っていくと、善↓善良↓良好↓愛好

↓④。訓読で確認すると「詩賦ヲ善しニ愛好する」となり、自信をもってマークするが、これは間違い。実は「良好」は「良よしニ好よし」なので「よし」という形容詞（あるいは「良好だ」という形容動詞）

であるのに対し、愛好は「愛すよニ好む」という動詞なのだ。だから「良好↓愛好よ」とはならない。

話の結末は、銭明経が詩の試験で第一位になったこと。傍線部の次の文章は「試験<sup>注4</sup>で古詩を試みるに、銭は必ず成績トップ<sup>注5</sup>」。この二つと論理が合うのは「詩賦ヲ善<sup>二</sup>」特技とする」だけ。詩を特技とするから詩の予備試験でも本試験でも成績優秀なのだ。

なお善の読みは「善<sup>一</sup>良<sup>よ</sup>」から「よし」であり、ここでは「善<sup>二</sup>〇<sup>一</sup>」となっているので「善<sup>よ</sup>し」を動詞化した「善<sup>よ</sup>くす」と読み、訓読は「詩賦を善くす」となる。

問2漢 前問が難問だったからこれはサービス問題。「竟<sup>ひん</sup>」は153、「乃<sup>すなわチ</sup>」は過去問復習で何度もおなじみ。だから正解は①。

問1(2)難問。疾↓疾病↓病氣↓①はあやまり。この「疾」は「〇ヲ疾」と読まなければならないので、「〇〇を疾<sup>二</sup>病氣にする」となるが、それでは話が続かない。そこでアトマワシ。

問3使役(一)傍線部の「使」は使役の公式<sup>三</sup>から「AをしてBしむ」だが、ここではAに相当する名詞がない。そこで「醒<sup>さ</sup>めしむ」からスタートし、①③を切る。あとはキズ探し。②は「呼ぶも…」の「も(…したが)」がキズ。特に逆接はない。④は「呼ばず<sup>ゆ</sup>之<sup>ち</sup>きて」と読むなら「不<sup>ず</sup>肯<sup>よ</sup>呼<sup>よ</sup>ぶ…」となっているはず。問題文によれば、(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところ)

はあっても、「。」は省かない。⑤は特に問題なくこれが正解。そして(正)解釈の正解は、「あえてこれをよびて醒めしめず↓あえてこれに声をかけて目覚めさせない↓声をかけて目覚めさせてやろう」という気にならなかった↓③」となる。

問1(2) 問3の正解が「声をかけて目覚めさせてやろう」という気にならなかった<sup>③</sup>」なので、⑤「憎悪」が正解。試験において成績上位者は古今東西常に憎まれる<sup>にく</sup>のだ。できる奴を「苦痛<sup>③</sup>」に思い、できる奴に「閉口<sup>④</sup>」する程度でも「声をかけて目覚めさせてやろう」という気にならなかった」可能性はある。しかし「憎いから起こさなかつた」憎いから試験で失敗させようとした」という確実な論理には負ける。

なお「疾」は「嫉妬」の「嫉」として「嫉む<sup>ねた</sup>」と読んでもよいし、「疾悪<sup>しつお</sup>」という熟語があるので「憎悪↓憎<sup>にくム</sup>」と読んでもよい。ただし「疾悪<sup>しつお</sup>」は今の日本では死語なので、知っている受験生はいない。安心して。

問4注 「説明・注で正解つかめ！」<sup>[10]</sup>により注を駆使して選択肢を切る。①の「あきれた」はBの前の「ぼうぜん」という読みからのヒツカケ訳。注10で「曹然<sup>ほうぜん</sup>」の意味は「ぼんやり」。②は「自分」がキ

ズ。出題者は「己すでに」を「己おのれに」と読み間違すう受験者がいることを想定し、「己おのれに及ぶ無し↓自分以上の実力者はいない」と訳した。

④は「気が動転」が注10「ぼんやり」と矛盾するキズ。③は注10の

「ぼんやり」にあたる訳がないので、⑤の「強引に」を「卒そつじ爾」4行

目の訳としてよいか迷うところ。卒爾の「爾じ」は熟語を思いつかない

ので、卒を熟語にすると「卒業」か「卒倒」。卒業は「卒おエル業ぎょう・卒

業おつ」。卒倒は「急に倒れる」。いずれにしても「強引に」という意

味はないので正解は「急いで・いそいで」の③。

※卒そつじ爾の「爾」は、「卒そつぜん然ぜん・急きゅうに」の「然」と同じく上の字を二字熟語化する言葉で、それ自体に意味はない。したがって「卒そつじ爾」「卒

然」ではない。また、「卒そつじ〇」となるような二字熟語は日本にはない。

問5(3) 押韻の問題。偶数句末の子音をそろえろ！問題により第四句の最後の漢字は「間」、子音はkanのan (genと読んでしまった人は書き下し文の追記を見よ)。そこで選択肢は①淡tanか④山san。

①は「淡」を「淡あわい光」と訳しているが、「淡水」という熟語もあるので、「淡」一字で「淡い光」と訳すのは無理。そこで「山」を「山」と訳す④が正解。



問6(主張)注 二つのステップでつかんだ正解候補は①と③だったね。そして話の結論は、銭明経が詩の試験で第一位になったこと。全文の最後||結論||傍線Dの最初の「よりて」は「∴によって↓∴という理由によって」という意味だろう。だから傍線Dの直前が第一位になった理由だ。そこで傍線Dの直前の意味を探っていくと、

「胸きょう中ちゆうに幾雲夢いくウンボウを吞のむかを知らず↓心の中にどれくらいの広大な湿原注を吞のむかわからない↓それほど心中が広大だ」となり、「氣宇壮大」の③が正解。①は「力強くかつ雄大な」の「力強く」が余分だ。

なお他の選択肢は次のとおり。

「雲夢ウンボウ」を説明した注13を見ないと「雲夢くもゆめ」から作った②「幻想的」にひっかかる。④は「意表をつく型破り」も「広大」からはずれるし、「違う形式の作品をあえて提出した」点も「あえて」がキズ。

銭明経は長編詩を書く時間がないので「仕方なく」短い四句の詩(絶句)を書いた。⑤は「柔軟な」がキズ。